

ペルシア語韻文版 『シンドバード・ナーメ』の話順について

西村 正身

フォーブズ・ファルコナーによって初めてその詳細な報告がなされてからすでに一世紀半以上の年月が経過しているにもかかわらず、西暦に換算して1374/75年の日付を持つペルシア語韻文版『シンドバード・ナーメ』（SNと略称される）には、実はまだ基本的な問題が未解決のままに残されている。それは、大臣や愛妾や王子が物語る挿入話の話順と話数の問題である。この物語を伝える写本¹は、インドで書写された、あるいは作詩されたと思われるただ一本だけ。8折版（15.24×24.13cm）に相当する大きさ（15.56×24.45cm）である。166葉（フォリオ）、今風に言えば332ページから成り、「賢人シンドバードの書」と記されたタイトル・ページに装飾が施されているほか、73枚の挿絵が残されているが、中には消そうとしたあとが見られるものもある。イギリスの東インド会社が収集したもので、長らくインディア・オフィス・ライブラリーに所蔵されていたが、統合の結果、現在はブリティッシュ・ライブラリーの所蔵となっている。

問題が生じた原因のひとつは、この写本の現状にまず求められる。乱丁や落丁が見られるにもかかわらず、通し番号が振られて綴じられているのである。キーワード（一葉の裏面末尾欄外に記された次葉の表面最初の語）の確認によって7つの大きなグループに分けられるのだが、落丁のせいでその順番の確定が必ずしも容易ではないようなのである。乱丁や落丁が生じた理由は、挿絵の描かれたページを何らかの理由で抜き取る際に、不幸なことに全体を床に落としてしまったのであろう、重なって落ちた部分は問題なかったのだが、残念なことにすべてが重なって落ちたわけではなく、不注意な重ね方をしたせいで前後が乱れてしまったためであると推測されている。東インド会社が入手したときにはすでにそうした欠陥を持っていたと言われている。その状態で通し番号が振られてしまったのである。3種類の異なる通し番号が確認されるが、最後まで振られているのは2種である。抜き取られたページの所在が突き止められれば復元は遙に容易に、しかも完全なものとなるであろうが、今となってはその所在を突き止めることは不可能であろう。

もうひとつの原因は、この写本の最初の報告者であるフォーブズ・ファルコナー²が、詳細な報告をしたにもかかわらず、いくつかの挿入話を無視したらしいことにある。無視

¹ The British Library, I.O.Islamic 3214, Sindbadnama.

された挿入話を補ってW・A・クラウストン³が再び詳細な報告をしたのだが、話順に微妙なずれが生じてしまった。どちらの報告が正しいのかの検証がなされぬまま、その後は、この二人の提示した話順をもとに、その他の何人かの研究者によって、さらに微妙な異なりを見せる話順が繰り返し提示されて今日に至っているのが実情である。このペルシア語韻文版『シンドバード・ナーメ』の話順に触れる研究者は、そのなかのいずれかの話順を選ばなければならないという難問に直面するわけである。

問題の解決は、もちろん写本を精査する以外にはないわけであるが、これまでのところ再精査をする研究者は出現していないので、その前段階として、これまでどのような話順が提示されているのかを整理しておくのも、決して無駄なことではないと思われる。これまでこの物語の話順について注目に値する発言をした主な研究者は4人であるが、その他少数の研究者についても折々触れることになる。話順が問題なので、物語の内容には触れないが、必要に応じてB・E・ペリー『シンドバードの書の起源』（未知谷、拙訳、2001）に付した所収話梗概（355-560ページ）を参照していただければ幸いである。物語名には1864年のゲーデケ⁴以来の慣行となっていて、上記『シンドバードの書の起源』において筆者がまとめたラテン語名を添えることにする。

1) フォーブズ・ファルコナー (F. Falconer) の場合

では、初めてこの写本の内容を詳細に紹介したF・ファルコナーによる話順を紹介しよう。写本の特徴や、シンドバード物語小史などを記したのちに、「物語がよく知られている場合、またはその品性に問題がある場合は、タイトルのみを掲げるか、F・ボワソナーによるギリシア語版『シュンティパス』での位置を示す」（170ページ）として、ファルコナーは次のような話順を記述している。

まず枠物語の中で、王子の教育をシンドバードが引き受けるかどうかをめぐる3つの物語が語られる。脚注2に記した文献の第35巻No.139 (pp. 169-180) の174-175ページにかけてシンドバードが語る第1話「狐と猿 *vulpes et simia*」が24行にわたって記されており、翻訳の可能性がある。続く第2話は同じくシンドバードが語る「駱駝 *camelus*」で、175ページに21行にわたって紹介されており、これも翻訳と思われる。第3話も同じくシンドバードの語る「象 *elephantus*」で、176-177ページに40行にわたる記述があり、や

² Forbes Falconer, "The Sindibād Nāmāh", in: *The Asiatic Journal and Monthly Register for British and Foreign India, China, and Australasia*, New Series, vol. 35, No. 139, pp. 169-180, vol. 36, No. 141, pp. 4-18 and vol. 36, No. 142, pp. 99-108 (1841).

³ W.A. Clouston, *The Book of Sindibād*, privately printed, Glasgow, 1884, pp. 1-121.

⁴ Karl Goedeke, "Liber de septem sapientibus", in: *Orient und Occident*, 3. Jahrgang, Heft 3, Göttingen, Verlag der Dieterichschen Buchhandlung, 1864, pp. 385-423.

はり翻訳の可能性がある。

王子が愛妾によって讒訴され、処刑されることになったあと、大臣たちが集まって王に処刑を思いとどまらせなければならぬと相談するなかで最年長の大臣によって語られる第4話「猿の王 rex simiarum」が、179-180ページに44行にわたって紹介されており、これも翻訳と思われる。この第4話は、以下に続く大臣たちと愛妾の7日間に及ぶ攻防の初日、つまり1日目に語られる物語である。以上の4話が前半の枠物語の中で語られている。

以下には、第36巻No.141 (pp. 4-18) に記される、7日間にわたり王子の処刑を思いとどまらせようとして大臣たちが語る2話ずつの物語と、処刑を執行させようとして愛妾の語る1話ずつの物語、沈黙の解けたあとの8日目に王子が語る6話のうち2話の物語が続く。

1日目。第1の大臣の語る第5話「告げ口鳥 avis」が4-5ページに51行にわたって記されており、翻訳の可能性がある。同じく第1の大臣の語る第6話「剣 gladius」が5-6ページに22行にわたって紹介されており、これも翻訳と思われる。大臣の物語を聞いた王は王子の処刑を思いとどまる（以下同様なのでこのことには触れない）。

2日目。中止となった王子の処刑を王に促すために愛妾の語る第7話「洗濯屋 lavator」が6ページに17行分記され、これも翻訳の可能性がある。次は第2の大臣の語る第8話「雉鳩 II turtures II」で、7-10ページにわたって132行、これも翻訳と思われる。これに続くのは第9話だが、ボワソナードによるギリシア語版『シュンティパス』⁵40ページの物語と同じとだけ記されており、これは「砂糖 zuchara」に相当する。

3日目。愛妾の語る第10話「鬼女 striga」が10-12ページにかけて70行にわたって紹介されている。これも翻訳であろうと思われる。第11話は第3の大臣の語る「猟犬 canis」で、13ページに11行分の梗概が記され、同じく第3の大臣の語る第12話「涙を流す小犬 III canicula III」が、やはり13ページに9行分の梗概で記されている。

4日目。愛妾の語る第13話「猪 aper」が13-14ページに20行分の梗概で紹介されている。続く第14話は第4の大臣の語る物語だが、14ページに、ギリシア語版『シュンティパス』48ページと同じであるとだけ記されており、これは「浴場主 balneator」⁶にあたる。第15話も第4の大臣の語る物語であるが、14ページにやはり『シュンティパス』51ページを見よ、と記されていて、これは「涙を流す小犬 II canicula II」に相当するものである。

5日目に入った部分は欠葉で、以下には落丁や乱丁が顕著に見られると注意を促したうえで、たぶん愛妾が現われて王子を処刑するよう王にけしかけるのだと思われるが、次に

⁵ F. Boissonade, *De Syntipa et Cyri filio Andreopuli narratio e codd. Pariss., Parisiis, de Bure frères, 1828.* しかしこの書は未見で、次の書に、元版のページ数を添えて付せられているものによった。V. Jernstedt, *Mich. Andreopuli Liber Syntipae*, Mémoires de l'Académie impériale des Sciences de Saint-Petersbourg, 1912.

⁶ この物語は分類上は「執事 I senescalus I」にあたるが、ここで対象となっている東洋系の場合には「浴場主 balneator」のほうが適切であるので、この名を使うことにする。

確認できる物語は『シュンティパス』92ページで語られている物語で、語り手は第5の大臣と思われる、と14ページに記している。これはボワソナード版『シュンティパス』では「女たちの悪知恵Ⅲ *ingenia Ⅲ*」にあたる物語だが、これはギリシア語版でも後に改変された版に特有の物語であるので、この物語とともに語られている「女たちの悪知恵 *Ib ingenia Ib*」であると考えられる。これまで、大臣が2話、1日目を除いて愛妾が1話の物語を語っているが、この日については大臣の語る1話分しか言及されていないことになる。

これまでも、写本の何葉目なのかという情報はわずかし記されていないが、この5日目以降、そうした情報はほとんどなくなる。

6日目。愛妾の語る第17話「猿 *simia*」が14-15ページに32行にわたって記されており、翻訳かと思われる。第18話は第6の大臣が語る「三つの願い *nomina*」で、15-16ページに9行分の梗概が記され、『シュンティパス』84ページで語られていると言うだけで十分である、としている。第6の大臣の語る第19話は、老婆の策略と商人の妻と若者の物語で、『七人の大臣』(Tales, &c. p. 168)で語られており、ここに繰り返す必要はない、と16ページに記されているだけである。ここに参照文献として挙げられているのはおそらく1800年にJ・スコットによって翻訳出版されたものと思われる⁷が、原本は未見であるので、何とも言えない。しかし、策略をめぐる老婆と商人の妻と若者が登場するのは「マント *pallium*」しかないので、それだと見なして間違いはないであろう。クラウストンが収載しているスコット訳では、198-212ページで語られている物語である。

同じく16ページに記される次の物語は「狩に出かけた王子と、大臣が彼に仕掛けた策略の物語」というタイトルしか写本に残されていないもので、「ここに写本においてかなりの欠落があるようで、上記の物語(タイトルしか残されていない物語)のすべてが失われている」ということであるが、これは7日目に愛妾が語る第20話「泉 *fons*」と思われる。続いて大臣が語るはずの2話については何も触れられていない。

8日目に入って沈黙を破った王子の語る第21話「毒入りミルク *lac venenatum*」⁸は17ページに6行分の梗概で記されている。同じく王子の語る第22話「軽率な母親 *mater negligens*」が、同じ17ページに5行分の梗概で記されている。

王子の物語の続きは第36巻No.142の99-108ページに紹介されている。第23話「三歳の男子 *puer 3 annorum*」が99ページに4行の梗概で語られ、『シュンティパス』115ページと同じであると記されている。次も王子の語る第24話「五歳の男子 *puer 5 annorum*」で、99ページに29行にわたって記されており、これは翻訳かもしれない。同じく王子の語

⁷ *Tales, Anecdotes, and Letters, translated from the Arabic and Persian*, tr. by J. Scott, 1800. In: Clouston, *ibid.* pp. 123-214.

⁸ これまでこの物語の和名を「毒入り牛乳」としてきたが、牛乳(つまり牛の乳)ではない可能性のほうが高いので、ここに「毒入りミルク」と改める。

る第25話「盲目の老人 *senex caecus*」が99-103ページに146行にわたって紹介されており、これは翻訳であると思われる。第26話「四人の救出者 *4 liberatores*」も王子の語る物語で、104ページに35行の紹介がある。これも翻訳の可能性はある。

以下、写本において欠葉が見られ、枠物語は最後の部分まで残されているのであるが、さらなる挿入話が記されていたであろうと想像される部分は残念なことにすべて欠落している。従って、ファルコナーが記す挿入話は以上の全26話である。確認のためにその話順を整理すると次のようになる。

| | |
|--------------|------------------------|
| 1 狐と猿 | <i>vulpes et simia</i> |
| 2 駱駝 | <i>camelus</i> |
| 3 象 | <i>elephantus</i> |
| 4 猿の王 | <i>rex simiarum</i> |
| 5 告げ口鳥 | <i>avis</i> |
| 6 剣 | <i>gladius</i> |
| 7 洗濯屋 | <i>lavator</i> |
| 8 雉鳩Ⅱ | <i>turtures II</i> |
| 9 砂糖 | <i>zuchara</i> |
| 10 鬼女 | <i>striga</i> |
| 11 獵犬 | <i>canis</i> |
| 12 涙を流す小犬Ⅲ | <i>canicula III</i> |
| 13 猪 | <i>aper</i> |
| 14 浴場主 | <i>balneator</i> |
| 15 涙を流す小犬Ⅱ | <i>canicula II</i> |
| 16 女たちの悪知恵Ⅰb | <i>ingenia Ib</i> |
| 17 猿 | <i>simia</i> |
| 18 三つの願い | <i>nomina</i> |
| 19 マント | <i>pallium</i> |
| 20 泉 | <i>fons</i> |
| 21 毒入りミルク | <i>lac venenatum</i> |
| 22 軽率な母親 | <i>mater negligens</i> |
| 23 三歳の男の子 | <i>puer 3 annorum</i> |
| 24 五歳の男の子 | <i>puer 5 annorum</i> |
| 25 盲目の老人 | <i>senex caecus</i> |
| 26 四人の救出者 | <i>4 liberatores</i> |

このファルコナーの紹介文は翌1842年にフランス語に訳され、*Revue Britannique*, 5^e série, tome IX の165-180ページにファルコナーのNo.139の分が、392-405ページにファルコナーのNo.141とNo.142の分が掲載された⁹。理由は分からないがこのフランス語訳は完全なものではなく、挿入話に関しては第11話「獵犬 canis」と第19話「マント pallium」が省かれて全24話の紹介にとどまっているほか、第5話「告げ口鳥 avis」、第8話「雉鳩 II turtures II」、第10話「鬼女 striga」、第24話「五歳の男の子 puer 5 annorum」、第25話「盲目の老人 senex caecus」が大幅に簡略化されている。本文中には原著者ファルコナーの名も翻訳者の名も記されていない。ショーヴァンもその書誌（脚注16を参照）に訳者名を挙げていないので、おそらく目次にも記されていないのであろう。

1882年、D・コンパレッティは、『シンドバードの書についての研究』¹⁰において、上記のフランス語訳を使用して話順を記しているが、フランス語訳が不備であることに気づき、E・C・ザッハウの協力を得て原写本を調査してもらい（p. 6）、フランス語訳に抜けている第11話「獵犬 canis」を補い、全25話としている。第19話「マント pallium」は補われていない。また、第15話「涙を流す小犬 II canicula II」の次の第16話にあたる部分に物語の欠落を設定している。

1912年、上田敏はこのコンパレッティの著書によって、その序文と第1章にあたる部分を『七賢人物語考』¹¹として祖述しているが、未完に終わってしまったことが惜まれる。

1884年、M・ランダウは『デカメロンの源泉』（第2版）¹²において、ファルコナーによって話順を記しているが、なぜか第1話「狐と猿 vulpes et simia」、第2話「駱駝 camelus」、第3話「象 elephantus」、第22話「軽率な母親 mater negligens」の4話を記さず、全22話としている。また、ファルコナーの記す第16話「女たちの悪知恵 Ib ingenia Ib」と第17話「猿 simia」の間に空白を設けているが、その理由は不明である。

2) ウォルター・アレクサンダー・クラウストーン (W. A. Clouston) の場合

ファルコナーの報告から43年経った1884年に、クラウストーンが『シンディバードの書』¹³

⁹ “Le Sindibad Namah”, in: *Revue Britannique*, 5^e série, tome IX, pp. 165-180 et 392-405, 1842.

¹⁰ D. Comparetti / tr. by H.C. Coote, *Researches respecting the Book of Sindibād*, The Folk-Lore Society, London, 1882, (pp. 25, 30-31). これは初め1869年に、*Ricerche intorno al Libro di Sindibād*としてイタリア語で書かれたものであるが、著者の協力を得て英訳されたものが決定稿となっているので、ここではその英訳を使用する。

¹¹ 上田敏「七賢人物語考」（大正1年）、『上田敏全集』第9巻所収（pp.64-72）、教育出版センター、昭和54年。

¹² M. Landau, *Die Quellen des Dekameron*, 2nd ed., J Scheible, Stuttgart, 1884, (between pp.340-341, Tabelle B). 初版はコンパレッティの初版と同じ1869年である。

¹³ 脚註3を参照。

を出版した。これは、クラウストンによる序文 (pp. xvii-lvi) のほかに、F・ファルコナーによる報告を補足したもの (pp. 1-121) と、J・スコットがアラビア語から訳した『七人の大臣』(SVSと略称される。pp. 123-214) を合冊し、付録 (pp. 215-378) として、他の東洋系諸版と西洋系諸版の所収話の梗概と類話の紹介を収めたものである。

ここで検討するのはその第1部にあたるF・ファルコナーによる報告 (pp. 5-121) である。『シンドバード・ナーメ』の内容を紹介する部分については、クラウストンはファルコナーの書いた文の95.9%をそのまま使用している。しかし、写本を精査することによって、ファルコナーが例えば、『シュンティバス』を見よ、と記しているだけの部分の梗概(あるいは翻訳)をきちんと記している。さらにきわめて注目すべき点は、最初の報告者であるファルコナーがまったく触れていない「髪の毛 *capilli*」「アングレット *annuli*」「獅子 *leo*」の3話を発掘し、それを話順のなかに組み込んでいることである。

この新たな3話を加えた全体の話順であるが、4日目の第15話「涙を流す小犬II *canicula* II」まではファルコナーと同じ話順としているので、ここではそれ以降、つまり5日目以降の話順に触れれば十分である。

5日目に入って愛妾が物語を語っているのかどうかは、ファルコナーとは少し表現を変えて、その部分を含む写本がすべて欠落してしまっているので言明できない(63ページ)、と記している。目次では愛妾の語るはずの物語を「欠落」と記している(p. x)が、本文中ではあくまでも「ここで彼女が物語を語ったかどうかを言うことはできない」としている。ここでクラウストンは写本の第86葉から第127葉以降へと移り、新たに発掘した3話のうちの2話を配置している(63-69ページ)。それは、第5の大臣の語る物語としての第16話「髪の毛 *capilli*」、同じく第17話「アングレット *annuli*」である。第16話「髪の毛 *capilli*」は冒頭部分が欠けている物語だが、他のどの版にも見られない、このペルシア語韻文版『シンドバード・ナーメ』固有の物語である。

6日目の話順はファルコナーと同じで、第18話が愛妾の語る「猿 *simia*」、第19話が第6の大臣の語る「三つの願い *nomina*」、第20話が同じく「マント *pallium*」である(69-78ページ)。

7日目の最初に愛妾の語る第21話は「泉 *fons*」で、当然のことながらファルコナーと同じでタイトルのみである。ここでクラウストンは5日目に飛ばした写本の第87葉以下第126葉までの部分に戻る。ここにクラウストンは、ファルコナーではまったく触れられていなかった第7の大臣の語る物語として、第22話に新たに発掘した物語「獅子 *leo*」をあて、第23話に、ファルコナーが第5の大臣の語る第16話としている「女たちの悪知恵 *Ib ingenia Ib*」をあてている。

8日目に入って王子の語る物語の話数と話順はファルコナーと同じである(88-109ページ)。

ファルコナーと相違するのは5日目と7日目の話順で、新たに3話が増えていることによって、全29話となっている。確認のためにその話順を示すと次のようになる。

| | | |
|----|-----------|-----------------|
| 1 | 狐と猿 | vulpes et simia |
| 2 | 駱駝 | camelus |
| 3 | 象 | elephantus |
| 4 | 猿の王 | rex simiarum |
| 5 | 告げ口鳥 | avis |
| 6 | 剣 | gladius |
| 7 | 洗濯屋 | lavator |
| 8 | 雉鳩Ⅱ | turtures II |
| 9 | 砂糖 | zuchara |
| 10 | 鬼女 | striga |
| 11 | 猟犬 | canis |
| 12 | 涙を流す小犬Ⅲ | canicula III |
| 13 | 猪 | aper |
| 14 | 浴場主 | balneator |
| 15 | 涙を流す小犬Ⅱ | canicula II |
| 16 | 髪の毛 | capilli |
| 17 | アンクレット | annuli |
| 18 | 猿 | simia |
| 19 | 三つの願い | nomina |
| 20 | マント | pallium |
| 21 | 泉 | fons |
| 22 | 獅子 | leo |
| 23 | 女たちの悪知恵Ⅰb | ingenia Ib |
| 24 | 毒入りミルク | lac venenatum |
| 25 | 軽率な母親 | mater negligens |
| 26 | 三歳の男の子 | puer 3 annorum |
| 27 | 五歳の男の子 | puer 5 annorum |
| 28 | 盲目の老人 | senex caecus |
| 29 | 四人の救出者 | 4 liberatores |

1912年、A・ヒルカが提示した話順¹⁴は第12話と第15話に見られる *canicula* に同じ意味の *catula* をあてて順に *catula* II、*catula* I とし、第17話「アंकレット *annuli*」を同じ物語を別の観点からとらえて「義父 *socer*」と命名しているほかは、このクラウストンと同じである。5日目の愛妾の物語（第15話と第16話の間に相当）の欠落も想定していない。

筆者は2001年、B・E・ペリーの『シンドバードの書の起源』¹⁵を翻訳上梓したおり、その付録とした所収話順一覧（328ページ）および通覧（345ページ）において、5日目に愛妾の語る物語が欠落していることを想定してそれを第16話とし、以下の物語の番号をずらして全30話としたほかは、写本を精査し、新たな物語を発掘し、写本の情報を記していることが信頼に値すると考えたので、このクラウストンによって話順を記した。クラウストンの第16話「髪の毛 *capilli*」もその冒頭部分を欠いているということで、ここに何葉かの欠落が予想されるし、愛妾が5日目に物語を語らないと断定することは他の東洋系諸本と比べると不自然ですらあるので、ここに「欠落」を想定することには十分な根拠があると言えよう。目次と本文とで異なる記述をしたクラウストンの迷いのうち、目次のほうを真相に近いと判断したわけである。ちなみに、先に触れたコンパレッティも第16話に欠落を想定している。

3) ヴィクトール・ショーヴァン (V. Chauvin) の場合

次に検討するのはV・ショーヴァンである。ショーヴァンは浩瀚な『アラブ文献目録』を著し、その一卷を『シュンティパス』¹⁶と題して1904年に出版し、東洋系の「シンドバード物語」諸版、その類似の物語、西洋系の「七賢人物語」「ドロパトス」、その類似の物語等の原典・翻訳・研究書・所収話の梗概・類話の指摘等をしており、今なお「シンドバード・ナーメ」および「七賢人物語」の研究には欠くことのできない文献である。

この『アラブ文献目録』でペルシア語版を扱う10ページの脚注に、「この版には次の物語が含まれている」として、33-213ページに記されている所収話梗概に付せられた通し番号による話順が挙げられている。梓物語を除いて所収話のみの話順を記すと次の通りである。

39, 40, 41, 42, 3, 7, 4, 21, 10, 8B, 31, 13, 30, 12, 47, 13, 34, 32, 19, 23, 11, 25, 44, 37, 26, 27, 28, 45

¹⁴ A. Hilka, *Historia septem sapientum. I.*, Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, Heidelberg, 1912, p. XXV.

¹⁵ B.E. Perry, *The Origin of the Book of Sindbad*, Sonderdruck aus *Fabula*, Walter De Gruyter & Co., Berlin, 1960. 拙訳は『シンドバードの書の起源』未知谷、2001年。

¹⁶ V. Chauvin, *Bibliographie des ouvrages arabes*, tome VIII, Syntipas, Liège/Leipzig, 1904.

ショーヴァンはラテン語名を使用せず、フランス語によってタイトルを付しているが、これに今までと同じように話順番号を付け、和名とラテン語名を添えて記すと、次のようになる。

| | | |
|----|------------|-----------------|
| 1 | 狐と猿 | vulpes et simia |
| 2 | 駱駝 | camelus |
| 3 | 象 | elephantus |
| 4 | 猿の王 | rex simiarum |
| 5 | 告げ口鳥 | avis |
| 6 | 剣 | gladius |
| 7 | 洗濯屋 | lavator |
| 8 | 雉鳩Ⅱ | turtures II |
| 9 | 砂糖 | zuchara |
| 10 | 鬼女 | striga |
| 11 | 猟犬 | canis |
| 12 | 涙を流す小犬Ⅲ | canicula III |
| 13 | 猪 | aper |
| 14 | 浴場主 | balneator |
| 15 | 髪の毛 | capilli |
| 16 | 涙を流す小犬Ⅱ | canicula II |
| 17 | 女たちの悪知恵 Ib | ingenia Ib |
| 18 | 猿 | simia |
| 19 | 三つの願い | nomina |
| 20 | マント | pallium |
| 21 | 泉 | fons |
| 22 | 毒入りミルク | lac venenatum |
| 23 | 軽率な母親 | mater negligens |
| 24 | 若い娘に変装した恋人 | iuvenis femina |
| 25 | 盲目の老人 | senex caecus |
| 26 | 三歳の男の子 | puer 3 annorum |
| 27 | 五歳の男の子 | puer 5 annorum |
| 28 | 四人の救出者 | 4 liberatores |

第14話「浴場主 *balneator*」まではファルコナーおよびクラウストンの話順と一致しているが、ファルコナーの第15話の位置にクラウストンが指摘した「髪の毛 *capilli*」を入れ、ファルコナーとクラウストンが第15話としている「涙を流す小犬II *canicula II*」を第16話の位置に下げている。クラウストンと比べると、第15話と第16話が入れ替わっていることになる。以下、王子の語る第2の物語、つまり第23話「軽率な母親 *mater negligens*」まではファルコナーと一致している。特徴的なのはその続きで、第24話に独自に「若い娘に変装した恋人 *iuvenis femina*」をあて、続く3話も話順をくずして、第25話に「盲目の老人 *senex caecus*」が繰り上がり、第26話に「三歳の男の子 *puer 3 annorum*」、第27話に「五歳の男の子 *puer 5 annorum*」が続いている。

ショーヴァンはこの話順を、何を典拠にして決めたのであろうか。おそらく基本的にはファルコナーによって（そのフランス語訳によってではなく）話順を記し、クラウストンの著書は見えていないと思われる。なぜなら、ファルコナーのフランス語訳には抜け落ちている「猟犬 *canis*」と「マント *pallium*」を正しい位置に入れていることと、クラウストンが7日目に下げた「女たちの悪知恵 *Ib ingenia Ib*」をファルコナーと同じ5日目に配置していることから直接ファルコナーを見ていると思われるのに反し、クラウストンが記す第17話「アンクレット *annuli*」と第22話「獅子 *leo*」を挙げていないからである。

では、クラウストンが初めて指摘した「髪の毛 *capilli*」を、彼はどこから採用したのか。それは、『アラブ文献目録』77ページによれば、トルコ語版「シンドバードの書」について報告しているドゥクールドゥマンシュの論文からである¹⁷。しかし、ショーヴァンはその位置に関しては誤解をしている。ドゥクールドゥマンシュはその176ページにおいて、「ペルシア語（韻文）版は、トルコ語版に見られる第5の大臣の最初の物語『パン *panes*』を欠いている。クラウストン氏はその位置に、写本の別の所に見いだした物語断片を置いている」と記しているが、ショーヴァンはこの物語を第4の大臣の第2の物語の位置、つまり第15話とし、もともとその位置にあった「涙を流す小犬II *canicula II*」を、第5の大臣の第1の物語つまり第16話の位置に下げている、つまり、先にも述べたように、この第15話と第16話の位置がクラウストンとショーヴァンでは入れ替わっているのである。ショーヴァンがいかなる根拠によってこのような話順にしたのかは、不明というほかはない。「盲目の老人 *senex caecus*」の位置が繰り上がっている点も、なぜそのようにしたのかは不明である。

しかし、ここまでは先行の研究に依拠していると言うことはできる。最大の疑問点は第24話として挙げている「若い娘に変装した恋人 *iuvenis femina*」である。この物語はシ

¹⁷ J.-A. Decourdemanche, « Note sur une version turque du <Livre de Sendabad> », in : *Journal Asiatique*, 9^e série, c. XIII, 1899, pp. 173-177.

ヨーヴァンにおいて初めて出現する。彼はどこからこの物語を引っ張り出してきたのだろうか。『アラブ文献目録』でこの物語の梗概を記している71ページにも、S. Nāmeḥとは記されているが、他の所収話の場合には記されているページ数の指示は挙げられておらず、この物語がペルシア語韻文版『シンドバード・ナーメ』に含まれているという確証にはなっていない。同書71-72ページはヘブライ語版に固有の物語が紹介されているページであって、ヘブライ語版の参照ページならば、ショーヴァンはもちろん列挙している。この「若い娘に変装した恋人 *iuvenis femina*」は東洋系の諸版の中でもヘブライ語版2種¹⁸とそのひとつのラテン語訳¹⁹にしか確認されていない物語なのである。この物語がペルシア語韻文版『シンドバード・ナーメ』に含まれているとショーヴァンが判断した理由は、今のところは謎としか言いようがない。

彼が写本そのものを見ていないことは、これまでの記述から想像に難くないであろう。

4) アハメド・アーテシュ (A. Ates) の場合

最後にトルコの研究者アハメド・アーテシュによる話順を見ておこう。アーテシュは、それまではE・W・レインに宛てたW・H・モーリーの、東洋翻訳委員会 (The Oriental Translation Committee) 図書館所蔵の一写本に言及した1840年の日付を持つ書簡²⁰やC・リュウの『ブリティッシュ・ミュージアム所蔵ペルシア語写本目録』²¹のみによって知られ、具体的な物語の詳細については知られていなかったザヒーリー・アッ=サマルカンディーのペルシア語散文版『七人の大臣の物語』(ZaSと略称される)の校訂本文を1948年に出版した研究者である。1160年頃に書かれたこのアッ=サマルカンディー本は、ペルシア語韻文版『シンドバード・ナーメ』と同系統のもので、その親本とみなされるか、あるいは同じ親本から派生したものと考えられ、シンドバード物語の起源を考えるうえでもきわめて重要な版である。付録として、『アラビアン・ナイト』に吸収されたものとは別に、独立して伝承されてきたアラビア語版『シンドバード物語』(Atと略称される)が添えられ、トルコ語による詳細な研究論文が付されている²²。「シンドバード・サイクル」の研究史上、

¹⁸ 拙訳「ヘブライ語版『センデバル物語』の紹介」(「作新学院大学紀要」第11号、pp. 41-77、2001年)の68ページ参照。

¹⁹ 拙訳「七賢人物語の試訳ならびに概観——その1 Latin mis^A, TNの試訳——」(「作新学院大学紀要」第4号、pp. 31-60、1994年)の50-51ページ参照。脚註14の和訳である。

²⁰ W.H. Morley, in: *The Thousand and One Nights*, tr. by E.W. Lane, vol. III, pp. 681-682 (foot note 32), Chatto and Windus, London, 1912 (1st edition, 1841).

²¹ Ch. Rieu, *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, London, 1879-83. (according to B.E. Perry)

²² A. Ateş, *Sindbād-Nāme, yazan Muhammed b. Alī Az-Zahīrī As-Samarqandī, Arapça Sindbād-Nāme ile birlikte*, University of Istanbul Publications no. 343, Milli Eğitim Basımevi, Istanbul 1948.

画期的な業績である。ここに併録されているアラビア語版『シンドバード物語』(At) については、いずれアラビア語原典からの翻訳を公にする予定である。

アーテシュはトルコ語による論文の8-9ページの間の一覧表で、次のような話順を挙げている。

| | | |
|----|------------|-----------------|
| 1 | 狐と猿 | vulpes et simia |
| 2 | 駱駝 | camelus |
| 3 | 象 | elephantus |
| 4 | 猿の王 | rex simiarum |
| 5 | 告げ口鳥 | avis |
| 6 | 剣 | gladius |
| 7 | 洗濯屋 | lavator |
| 8 | 雉鳩 II | turtures II |
| 9 | 砂糖 | zuchara |
| 10 | 鬼女 | striga |
| 11 | 獵犬 | canis |
| 12 | 涙を流す小犬 III | canicula III |
| 13 | 猪 | aper |
| 14 | 浴場主 | balneator |
| 15 | アンクレット | annuli |
| 16 | 涙を流す小犬 II | canicula II |
| 17 | 女たちの悪知恵 Ib | ingenia Ib |
| 18 | 猿 | simia |
| 19 | 三つの願い | nomina |
| 20 | マント | pallium |
| 21 | 泉 | fons |
| 22 | 毒入りミルク | lac venenatum |
| 23 | 軽率な母親 | mater negligens |
| 24 | 若い娘に変装した恋人 | iuvenis femina |
| 25 | 盲目の老人 | senex caecus |
| 26 | 三歳の男の子 | puer 3 annorum |
| 27 | 五歳の男の子 | puer 5 annorum |
| 28 | 四人の救出者 | 4 liberatores |

この話順をアーテシュはファルコナーの名で記しているが、主としてショーヴァンに依拠して挙げており、おそらくファルコナーは見えていないと思われる。そのことは第25話「盲目の老人 *senex caecus*」、第26話「三歳の男の子 *puer 3 annorum*」、第27話「五歳の男の子 *puer 5 annorum*」の話順が一致していること、および8-9ページの間の一覧表からは確認できないが、17ページにおいて、「若い娘に変装した恋人 *iuvenis femina*」が含まれていることをこのペルシア語韻文版『シンドバード・ナーメ』の特徴として特記していることから明らかであろう。「若い娘に変装した恋人 *iuvenis femina*」を挙げる先行研究はショーヴァンだけだからである。その位置がどこであるのかは記されていないのだが、一覧表で空位になっている第24話にあてるのが妥当と思われる。前ページに記した話順は、その第24話を補った話順である。その結果として、8日目の王子の語る物語の話順は、完全にショーヴァンと一致することになる。

しかし、アーテシュはショーヴァンの話順とまったく一致しているわけではなく、ショーヴァンの挙げる第15話「髪の毛 *capilli*」の位置に「アングレット *annuli*」をあて、「髪の毛 *capilli*」については何も触れていない。「アングレット *annuli*」にはファルコナーもショーヴァンも触れておらず、クラウストンが挙げているだけであるので、アーテシュがなぜ「髪の毛 *capilli*」と「アングレット *annuli*」を差し替えたのかは不明である。可能性は少ないと思うが、クラウストンを参照したということなのであろうか。

すでに指摘したとおり、第15話と第16話および第25話から第27話までの話順は、アーテシュがトルコ語論文の8-9ページの間にある一覧表において「ファルコナーによる」として挙げている話順と一致している。つまり、ファルコナーによる実際の話順とは異なる話順を、ファルコナーによる話順として挙げているわけである。アーテシュがなぜそのような話順にしたのか、という疑問点は残るが、アーテシュがファルコナーを見ていないのではないかという疑いはますます深まるものといえよう。この8-9ページの一覧表は、第3話をシンドバードではなく大臣の語る物語としているほか、東洋系の他版の話順に関しても脱落が見られ、残念ながら粗雑なものであると言える。

アーテシュが写本そのものを精査していないことは明らかである。

1959/60年に『シンドバードの書の起源』を書いたB・E・ペリーはアーテシュによって話順を考えている。ペルシア語韻文版『シンドバード・ナーメ』(SN)とその「親本と考えられるザヒーリー・アッ=サマルカンディー一本」(つまり、ペルシア語散文版『七人の大臣の物語』。Perry, 63p., 拙訳101ページ)について触れている原註71に、「挿入話とその順序が同じであることに関する限り、最初の14話までは二つのペルシア語版に違いはまったく見られない」と記し、同じ63ページ(拙訳101ページ)に、「アッ=サマルカンディー一本にもない挿話が一話だけある」とし、また原註71にも「新しく一話を加えられて」と記しているからである。この2つの条件を満たす話順はアーテシュによる話順のみ

である。アーテシュが依拠しているショーヴァンによれば、アッ＝サマルカンディー本にない物語は「髪の毛 capilli」と「若い娘に変装した恋人 iuvenis femina」の2話になってしまうし、ファルコナーとクラウストンによれば最初の15話までが同じ話順でなければならないからである。従って、アッ＝サマルカンディー本にない一話としてペリーの念頭にあったのは「若い娘に変装した恋人 iuvenis femina」であったということになる。起源の問題を考えるうえで重要なこの『シンドバードの書の起源』の拙訳を公にした時点では、筆者はこの「一話」をクラウストンが挙げている「髪の毛 capilli」のことと思い込んでいたのだが、ここに、ペリーが言わんとしている「一話」とは「若い娘に変装した恋人 iuvenis femina」のことであると訂正しておく。拙訳101ページと註71に補足した <capilli> を <iuvenis femina> に訂正していただければ幸いである。

5) まとめ

以上、主要な4人の研究者による話順を、語られる日にちと語り手を記してひとつの表にまとめると次のページのようになる。この表の右端には、ザヒーリー・アッ＝サマルカンディーによるペルシア語散文版『七人の大臣の物語』(ZaS)の話順を参考までに挙げている。その話順から見ても、今その話順を考察しているペルシア語韻文版『シンドバード・ナーメ』(SN)との関係は疑いようもなく明らかである。

なお、先に「ショーヴァン」の項でちょっと触れたトルコ語版「シンドバードの書」は『^{トッファアット・アル・アハヤール}素晴らしい贈り物』というタイトルで、その話順は、第34話を欠く以外はアッ＝サマルカンディー本と同じということである(ドゥクールドウマンシュおよびアーテシュによる)。

さて、1884年のクラウストンによる話順が、写本の欠落に起因すると考えられる「蜂蜜 mel」がないことは別としても、第16話「髪の毛 capilli」が「パン panes」の替わりに同じ位置に入っている点を除けば、このアッ＝サマルカンディー本と完全に一致していることが注目すべきことであると言える。なぜなら、アッ＝サマルカンディー本の内容が明らかになったのはアーテシュが校訂版を出版した1948年のことであり、クラウストンはその話順を知らなかったからである。

ファルコナーについては第15話「涙を流す小犬 II canicula II」までが、ショーヴァンとアーテシュについては第14話「浴場主 balneator」までがアッ＝サマルカンディー本と一致しているので、このペルシア語韻文版『シンドバード・ナーメ』における話順に関して問題となるのはそれ以降、つまり第15話ないし第16話から7日目までの物語の話順と、そこに「髪の毛 capilli」が含まれているのかどうか、また、8日目になって王子の語る物語の中に、果たして「若い娘に変装した恋人 iuvenis femina」が含まれているのかどうか、さらに、「三歳の男の子 puer 3 annorum」「五歳の男の子 puer 5 annorum」「盲目

SNとZaSの話順一覧

Sはシンドバード、◎は愛妾、△は王子、無印は大臣の語る物語。①～⑧は日にちの経過。

| | S N (1 3 7 4 / 1 3 7 5) | | | | ZaS (ca. 1160) |
|----|--|--|--|--|---|
| | Falconer (1841) | Clouston (1884) | Chauvin (1904) | Ates (1948) | Ates (1948) |
| | 1 S vulpes et simia 2 S camelus 3 S elephantus | 1 S vulpes et simia 2 S camelus 3 S elephantus | 1 S vulpes et simia 2 S camelus 3 S elephantus | 1 S vulpes et simia 2 S camelus 3 elephantus | 1 S vulpes et simia 2 S camelus 3 S elephantus |
| ① | 4 rex simiarum | 4 rex simiarum | 4 rex simiarum | 4 rex simiarum | 4 rex simiarum |
| ① | 5 avis 6 gladius | 5 avis 6 gladius | 5 avis 6 gladius | 5 avis 6 gladius | 5 avis 6 gladius |
| ② | 7◎lavator 8 turtures II 9 zuchara | 7◎lavator 8 turtures II 9 zuchara | 7◎lavator 8 turtures II 9 zuchara | 7◎lavator 8 turtures II 9 zuchara | 7◎lavator 8 turtures II 9 zuchara |
| ③ | 10◎striga 11 canis 12 canicula III | 10◎striga 11 canis 12 canicula III | 10◎striga 11 canis 12 canicula III | 10◎striga 11 canis 12 canicula III | 10◎striga 11 canis 12 canicula III |
| ④ | 13◎aper 14 balneator 15 canicula II | 13◎aper 14 balneator 15 canicula II | 13◎aper 14 balneator 15 capilli | 13◎aper 14 balneator 15 annuli | 13◎aper 14 balneator 15 canicula II |
| ⑤ | 16 ingenia Ib | 16 capilli 17 annuli | 16 canicula II 17 ingenia Ib | 16 canicula II 17 ingenia Ib | 16◎mel 17 panes 18 annuli |
| ⑥ | 17◎simia 18 nomina 19 pallium | 18◎simia 19 nomina 20 pallium | 18◎simia 19 nomina 20 pallium | 18◎simia 19 nomina 20 pallium | 19◎simia 20 nomina 21 pallium |
| ⑦ | 20◎fons | 21◎fons 22 leo 23 ingenia Ib | 21◎fons | 21◎fons | 22◎fons 23 leo 24 ingenia Ia |
| ⑧ | 21△lac venenatum 22△mater negligens 23△puer 3 annorum 24△puer 5 annorum 25△senex caecus 26△4 liberatores | 24△lac venenatum 25△mater negligens 26△puer 3 annorum 27△puer 5 annorum 28△senex caecus 29△4 liberatores | 22△lac venenatum 23△mater negligens 24△iuvenis femina 25△senex caecus 26△puer 3 annorum 27△puer 5 annorum 28△4 liberatores | 22△lac venenatum 23△mater negligens 24△iuvenis femina 25△senex caecus 26△puer 3 annorum 27△puer 5 annorum 28△4 liberatores | 25△lac venenatum 26△mater negligens 27△puer 3 annorum 28△puer 5 annorum 29△senex caecus 30△4 liberatores 31◎vulpes 32 S fatum 33 S upupa 34 S vespa et formica |
| 補足 | *フランス語訳 (1842) は canis, pallium を欠く。 *D. Comparetti は pallium を欠く。 *M. Landau は vulpes et simia, camelus, elephantus, mater negligens を欠く。 | *Clouston は写本と Falconer に依拠。 * = A. Hilka (1912) * = M. Nishimura (2001)。ただしNo. 16に lacunaを設定。 *panes が capilli と入れ替わっているほかは ZaS と一致。 | *ChauvinはFalconer に拠るが、一部異なる。 (補足に記した事項の詳細は本文を参照されたい) | *Ates は Chauvin に拠るが、一部異なる。 * = B.E.Perry (1959) | *ZaSはAtesにより初めて出版 (1948)。 *Clouston (1884) は panes 以外はこれと一致。 *第15話までは Falconer と一致。 *第14話までは Chauvin, Ates と一致。 |

の老人 *senex caecus*」の話順がどうなっているのか、という点である。

5日目から7日目までの話順でもうひとつ問題になるのが、「女たちの悪知恵 *Ib ingenia Ib*」の位置である。この物語をファルコナーは5日目の第16話にあてており、第15話との間に落丁が見られるということは記しているが、次の第17話との間に切れ目があるというようなことは一切述べていない。ファルコナーにおいては、第16話から第20話までは連続していることになる。同じ物語をクラウストンは7日目の第23話にあてており、第21話「泉 *fons*」のタイトルのあとに欠葉があることは記しているが、第22話「獅子 *leo*」以降に断絶があるということは述べていない。乱丁を正す際の難しさがあるのだと思うが、果たしてどちらの話順が妥当なのかも検討課題のひとつであろう。

これまでのところでは、自分自身で写本そのものを詳細に検討しているのはファルコナーとクラウストンの2人だけである。従って、話順の問題点はファルコナーとクラウストンの2人の提示する話順のうち、相違が見られる5日目と7日目の話順に絞ることもできそうである。

この2人の中では、写本の情報に触れながら記述に省略をせず、しかも一話以外はアッ＝サマルカンディー本と完全に一致しているクラウストンのほうが信頼できる、というのが筆者の結論である。すでに述べたように筆者は拙訳『シンドバードの書の起源』(2001年)において、1話の欠落を想定したうえで、すでにこのクラウストンによる話順を採用している。もう一度ペルシア語写本の精査がなされるまでは、クラウストンによる話順をこのペルシア語韻文版『シンドバード・ナーメ』の所収話順として受け入れるのがもっとも妥当であろうと思われる。

最後に、話順に触れている研究者の系譜を図示すると次のようになる。

